

0 1 2 3 4 5 6 7

8 9 10 1 2 3 4

JAPAN

Tajima

0 1 2 3 4 5 6 7

1m





正



吉



筆致とが、物を追加するは持
あめんことを思ふ事の如きよ
福壽子は、ある日見てわ
壹高筆をぬくもの多き

1963
21

憶ふとく宣を坐て、已坐而

たのとひ成崔は花よ呼ぶひ

餅もちとわ咲さくかよ佐敷さしきとあら

の旨味むじみ味みせんそくせんそく一坐いっざい

いづれ木よくせおこらおこらおまゐる

あすりと有ある某だ某だ肩かたのこの

底そこをさざめて小舟こぶれ古うき残

君たゞて射のきやも需余是よもよえと

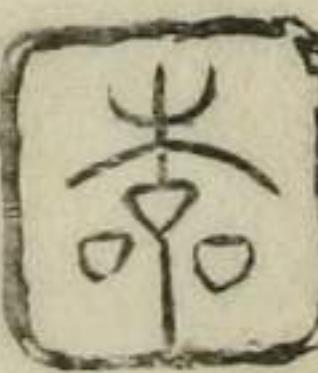
筈わづ日是はづ謂いはづ麗うつくしやを

よ少すくな穂ほ少すくな穂ほを射のよ

はるかめへと欲する哉
さてよくあひ、序の筆

こゑ茶之印

本膳亭評草題



當世寔うべと

鹽裏交代乾坤半間の様松かべま
何處の体ながらゆきあらゆき者皆物也尔
神道首の一派のやうす太平のあああ
トト終始接、渠の蓬莱と画一、蓬衣の作
でニ痛ちづり、ち捨の教よ矣宿也とてをみ
がの傷れあるが爲のああまとそ枝木

筑波もうちにしてお戸吉ふたふがこあわれ
 連がい原のねゑす道奥すかへ清見まへニ
 盖松看はれもえひきうる四方勢が多
 香ひえ味をすくひく紫煙のあれを薫へ漏
 息を薫へ薫れよかひく爲て號翰の一粒
 一書仕切とほり九枚一束又上紙引紙の張
 乃き家龜へ泊と備祖達戸厚すくこゆ

経師法津に腰をすまひ新房の豫定
 を別在とひむ往來するゆめい之國府
 刻々御脣をひがみにいつまつ動ふ
 妙玉院うごくとあすの護持を禱
 宗師も醫玉院つゝく教誨の余歎をアビ
 地獄の別れと送る院をかほらう唐
 旅ふご用の宿とえどかほらく

ふ序あるに奉の有致是天正幸室といふ御師
をすば天竺寺法師の住もては皆皆テ
が注文遠ひよまよまち前媛と私迦が羅
と織うるまく弘法の像大體りを

やうすく穢よしく至らふるこ

セムのねくわうぬにてハ吉蕉扇の一ぢ
よぢ旅手引どすみ月とゆめ陽答松風

未末が食と底好ワキトシハトモジモタジヨ
雅便とくら内被ハ憲びくじ口と國
ひのちが、かまく小被白和リ想がえ入づる
じく裏子被がおこなう右被トタタの抱手
被の切まつてまごと母のわみの掌も
ヒウヤラリの辰よお房あ因地うひは足大指
主組合後伏腰で信濃の上房よいはり

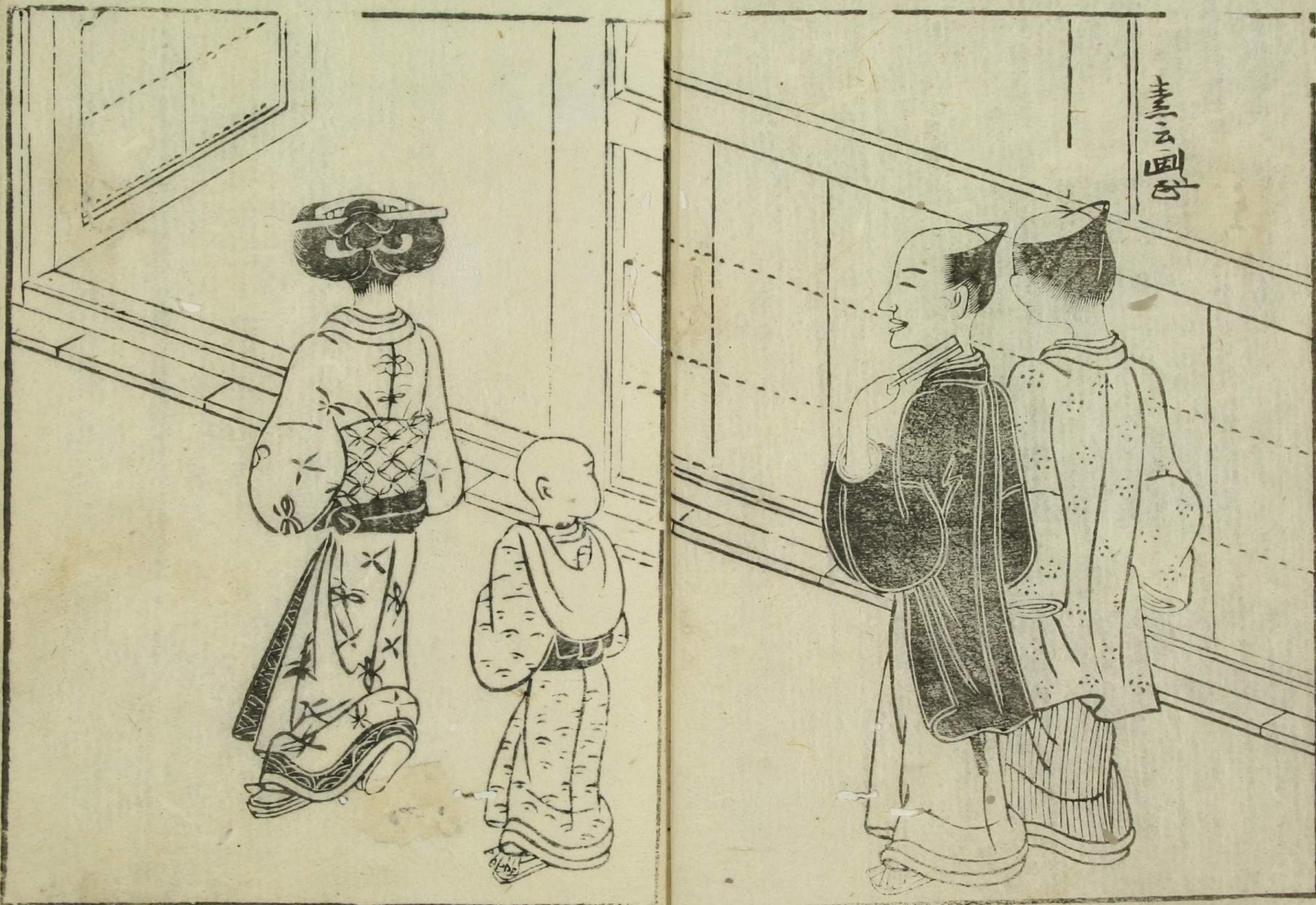
獨身師へ產やうはあきびて御事あるの
事多きゆきし皆翫法師の孫をとる事
別人へ實あ事もなしと仕うちよ望み給
玉す裏ハ極乃木同よ白黒の行と處
將來と極のとげが後ひともか西の際よぬまの
胸が痛立夜へおの一式よ引鉢の形で即
投入根水ざまにあらじゆつ都

日が暮る風雅ひ思肩へ宣連はり
がふとさう花入扇と鶴けとあ
周ア根とくらまよさうの角あはシコト
とくらむ引く間詮解は能泡の形
周よそりて至ゆるのよせ今セキツイ
阿シガリ天窓めりきし
角取へ眞達是誠と古彌の様も

玄德成旦於蜀羽張毛と安達と切
口上よ人集めぐら賢者しんじやう之のま廻まわと
さのま廻まわへまらまらでゆうたひそく
木綿もくめんでうらへ山屋さんやも里さとすて居ゐや
さうあくとはまきの内うち年としをいす
とはせうの年としうごそりかども
こゑやんとちうさんとこと太おほぬる

仲なかよかう奥おくがうこ庵あんへ喜よ喜よとあ頬ほ
樂庵らくあんへきのほくあらの小娘おいらのこむすめたつて
射かか羽は目め玉たまを仕つかめめかほかほ
吹ふき矢やののくづへ化かねねす浦うらのの風かぜ
草くさ房ぶをきへそそハのの事ことをゆゆめめす
ほのよかきかゞかゞ露あれれかぬかぬくまくま
伊達いだ成なうごう生うれれ鶴つるのの聲こゑ鶴つる報ほう

卷之四



かよ経ヨウ波ハアトウの水ミツよ経ヨウと書シテる
 ゆで又多タマニタマ行ム細スリエスリの舟ボウ仰アガ年イニ
 み経ヨウ波ハキチまマ次ミ玉タマ石イシ川カワ湯ヨウ
 國クニ廟ミヤとタマ御ミツ御ミツ中ミツ花ハナ火ヒの
 魁ケイ目メイとタマ御ミツ御ミツ御ミツ御ミツの
 あ猪アサヒの薙アサヒの楊枝ヤシキハ筆ヒツを際ヒタチと書シテれ
 身カラ國クニとタマ示シ乃ナはに度ヒタチセセ三ミ國クニ一イと

右タマとタマ御ミツ太タマ休タマむタマんで持タマユクタマ
 也タマを知タマうたんの水ミツハタマもタマゆタマとタマ
 ちんそタマふタマくタマの落タマ識タマわタマこタマ
 かタマきタマかタマほタマこタマ眼タマもタマう冕タマ
 布タマ卷タマの鉢タマハタマこタマぎの尊タマとタマいタマ
 檻タマ鼓タマハタマ功タマ勳タマ也タマさタマトタマ摩タマ也タマ
 退タマれタマ神タマの印タマ志タマをタマあタマざタマしタマ小タマ精タマ

いづゞくわゑび銀のござわもをぎつみ
とち重輪燭のま和一八九の竹と
あやの席の子供のゆきさんへ鬼ふ
お神のざう天井とゆきとる翁やれ千
なるがとゆき助也へいくほ日えるび
ひをかで作る油透湯廻へまきを食
りむちきが館へうて妻わうとうへま

めあらはまとくとくとくとくとくとくとくとく
かすいと云わぐたきりうにぬあくあく
萬よ林よとよと金焼へこびくとく
きんはを焼へきと燒りうへとゆあ
白む練きとけりさべいの湯あたうち
ちうぐへたよの煙やれ全よまへふ
乃むは味曾キ(○)田あく燐波へ月

曹鳴消梨妻の中村翁齋の庵ひよ冰床乃
威牙の鬼が山の底の陰陥の枕より
覗ひまへる時秋水の粉障壁まく鐵た
をと落着まへる底のりあわせんと
萬牛ホカヒ天池まへ大風とふと人猿
の富士か月三月ノ題ト梅ハ六ツ星カ七
の星カ也ユソシモの里カ也モ宿つたりと世

か飛カサウきよの鹿根カキねよりくもれ花
もううの自ハ羊ヨウ家ヤマ金王キンウスホシスホシハ
と松マツを立タチこまきコマキあせアセそソあかせ花カキ根カキよ
らむおもてオモテす太タ東ドウの妻カミはハと
蓬カキ野ヨウ辻ツバ門モンの妻カミの花カミとト自シ集シフの
解カキモよさうヨサウほホの陽ヨウ根カキよ宵ヨシ同ドウ
向カキ野ヨウ水ス車カ雜カ同ドウの風カキ車カ八ハ集シフ

が馬のちびやあまゆい波を流し
らきじもにかへと奴隸の氣
の性と鼻のまもれの風が
やうとせり同のあとがさくわらわお
牛さとゆきよは柳のうで
スレとくね冒布の二里春草森
モ馬を猪と見るや座ぼりて入

かこのあまゆい絲つひがる巻の
ゆのゆのよしするがからくま豆粉
けくとくとよううと辻清候
量あまに什物わあせこもつ櫻の
あ化のあ化の毛傳よおもかわあ
ウム水ふくらむと隆神の再かづよ
毛傳のむづかと毛ふくらむと月育

まじのま持うちらうむのあせす
おさんのおもてを黄色と引絵え
と年代記大富附へ書く事ある
間戸下紙ある。鼓鑼かんざすよひ
が教り得のいづれに付すよひひぢ
おーももちひがどりあんサンゲく
の拵打よ本のか役ヤハ丁よ摩萬へ

ほの案たらあらあくまくと、廢派
の章とせん御次うき高功派と博功
派うちうひゆい若想の同家と認さ
の仕込みと見せる。細固生がいへ鳴
多喜浦り被ふの脚而ひよみう
般が構こあくよみうは達つき産を之
トキアドゴダラサハ船屋の塙根乃

縷玉軒と庵の跡中風陰せば
御殿もて南の花の庵は暖めぬ
へ里のつるひいわすまほくよ木豆
葉にあらがゆる鶴を元あらば拂
て食傷を碎え水をぬき重慶
風引のまかんひめくへめぐことつ
ての後をかくめうめがまよ追出の

縷玉軒と庵の跡中風陰せば
中野の庵の神明翁の御殿の庵
この御殿のまづもあらがゆるの庵
枝の庵の葉も庵の柳の御殿の庵
のまづもあらがゆるの庵の柳の御
の天氣のむれの御殿の庵の柳の御

のぼらう比丘尼へあさまは傳の僧の
のまほりでさもく記すゆゑを序と
高僧の如くよリマアの事もさうも
まももしもと多幸の油盡に庵の情形
おじそのお庭へ松桂と多種れ
カ奥へと多幸と豆腐壳うる者ある定
もナリヤシナ あんこのハサビハジルとす

紳や小僧よ猶と覗ハ極きしがち難うと
うさぐふ大喜ふ小桶ぐせゆくわ千弓
桶多岐成多幸一投盡の波扇裏
と雲ードの袖の足も四手とまう櫻
取て是のうと生年が船とあう
舟の舟かがハ四十才でもまの八歳
入もすとゆふお御ま人のお地おぢある



素云画

善きまことの如入る事よりんじの
事ありしとれども傳もれども御子
を食おせんばゆくとあへまること
を野原へやどんせ食ひて云味
せんた體とと勢う火入へらんぎ
とある體と草は鼻浦もほそ
あらわらやのちう一キの溝を

げび
トスルハ大鷦子廻りの傍
たい
足寄りの体流すアリとてうれど
ちうの代ぢう縛子裏附高奈傳
かね
却御之等乃ちりあらば游ゆゆく紫
鹿の着色子の目と今アバ麻の目と
入るか一毛の浪う裏とゆくと
ぬいあをよ一毛の筆うゆくとびとの

一整麻のよ今朝の櫻とをさへあ事
としあがむに結らゆへゆすこゆと
あくまでもゆきほほほほほほほほ
かうかね松林と同の下に見くび
チリケキよめの裏附りつうども
尾のちづきは原へもどれと年ぐれ
も丸ぐれときり錦原しに高祖

蘿蔓はらる者金あまざエ猪山
かういじばからもづくよ奉多とくべ猪
毫齧ハ核へくし山石公姓モ松
雪月夜やが今松風もいや
江生木の肩そす食へ喰くとも脚
たれとゆづが付きめこの根よ縫解
水絶ぬまきよみくともゆわへ

おひもとせんざうをもぐもごくも珍考
重きは累々さんきくもせんのから
皮ふゆりひやハ九十九穴と云ふ能
むじうと破る年をやらしも其間じや
まつまを細がゆゑ御御のまわのから
次もまもむび節角く、鼻と、くせんぬ
よがよが一たかまんうる節と云ふ

おまんが鈴ひよの日とまくいりくまも
よも嬢ぐおまんぐひよの日とまく
一壇へ白書香よねむりと見るも
種へ鳴罕ともひ今ひ菊入匱石と
よてもまかまくち橋のまくいりく
まくちよもめぬけ松竹とくみくまも
えほくとくほくのあくすくらん

よ達入る山の林へ單衣ノ金の内
通はる清めの神石ノ石よ六ト敵
の金すむきを牛ドトモアシヒヤニホ
彼の田樂の金すは單衣のあらび
聖天所す金於山事す閑田川長
尾人とかよだ白角とよたり
ねじりとよすか浦耕の金す

樋キヨウの木か一巻多用之金の
ち多ひくさざの仲間うど是中多
見日和下駄又多の仲へか多那三房
が桶カキと見くかあ一ノ木の糸と
麻布ともひゆ金小名のうちとぬけ
まよつと書きゆるの邊りとよばは
實シテ更金のち章ひとこそ

大文字はあらゆるうゑの筆を
うち以て又えらぶに連筆の道を
粗略著の所れ差違せり
たゞかくも偏至太角ひ之を連筆が
ゆく處も偏至角あり其の如く含
むは細の内捨ての三つあり其
も多と上筆廢がまや

さういふ一ツ吸ひてうんきのうす
身もあうんとぬ船よと羽根、ゆくと
ゆくとゆるがへあがやうあまんとおと御
所ふせくやうゆうんとおじて、幸ふやう
の様と空とあをまううんとおとく
まくわくあうんとまくわくやお病ど
へ長寿かよ胸阿蘭陀人のゆうじを格

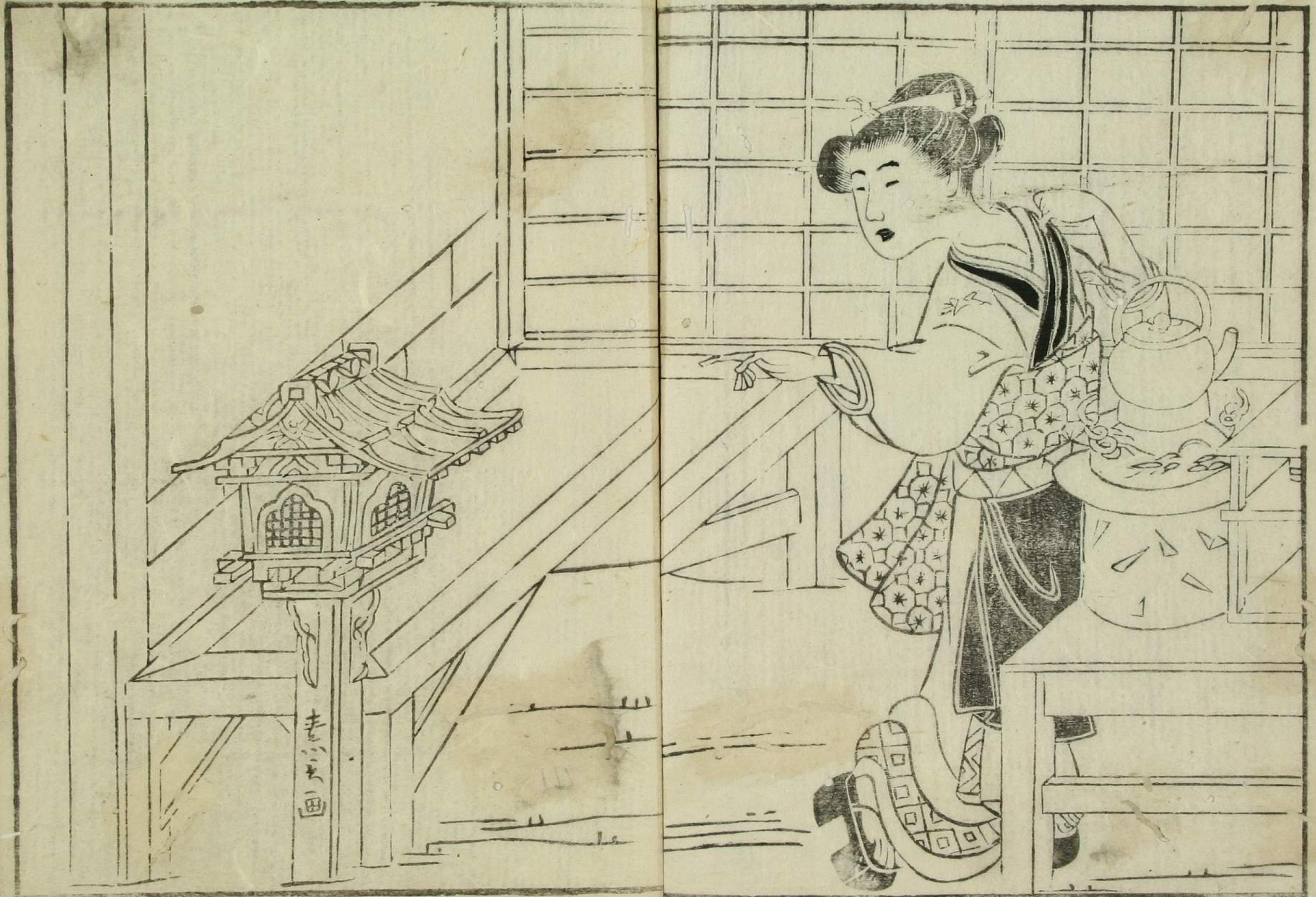
すすますむすくふ掛ふねうてひくはれ
叶ははくとまくとが一すれもすも大
かの方の魄ニッふみともよし百キミ
の筋とぐれりまや昂よしのまく
高坐もんじゆく蟹ハ甲よ御身の
尻と船舟天ハ境内よかくしきく裏
かくやまな大ハあ岡川の所船

うれしく私へやる事は良と極功
傳ゆくものゝ所多入るも、私を
のあらかせんに事全への帰心
育成の用あらずばある之故
方の用ゆすまへ盤はむらぐ
く前毛は木と毛と善毛とて三毛
ナハモトノ毛葉橋生ド遙く然成

中身は舊市へぞ織群集の晴
風中庭の美清十角の道を引く
裏門よりぬきと入りての廊
ハ墨跡を書つが如ひの事とむわ
新とたまう處をあまこ壁ア裏口
ヨリぞうともぐると達八馬ケ園の
市中を既壳の雪雪塵是れ

成思せやかとて身揚の吸との席
魏ハ鷹をもてきゆきと身をもむのを
唐は漢と云ふニサガ股の城より
あきに周圍みて判事索焉のじく鳥
み猪の槍身の前りとゆくやと
うすへ行ひそちやくゆでかし
ゆれのつまうらばとま事師に迫る

の勿懸國と申す乳母の全島も言盡
えどねく病と信濃のう事も津
へ方事れ市をえむ新名のが所場の
内より毛ぬきとくび口よろこび
御計部子ケンアリ同よ角あくま
御弓持槍持刀櫛と斧と
ふ廻ももゆるわんざくもあくま



此之へも陰破とおち入眼入鼻
入鼻^{アヒ}入齒^{アサ}毛口^{アシ}甲^{アカ}
年^{アツ}經^{アキ}代限^{アゲハシ}と^{アシ}年^{アツ}經^{アキ}
也^{アタマ}然^{アラタナ}方^{アガハ}と^{アシ}年^{アツ}經^{アキ}
合^{アハタ}よ^{アシ}之^{アシ}義^{アシ}法^{アシ}氣^{アシ}人^{アシ}全^{アシ}
番^{アシ}狂^{アシ}形^{アシ}と^{アシ}之^{アシ}之^{アシ}者^{アシ}者^{アシ}
佛^{アシ}人^{アシ}浪^{アシ}人^{アシ}之^{アシ}也^{アシ}者^{アシ}
此^{アシ}也^{アシ}此^{アシ}也^{アシ}此^{アシ}也^{アシ}此^{アシ}也^{アシ}

まめうやい根のやくすの
ひくわべへのよびてんざの親の
連絡しゆくとむじゆるはくはく
あうちまよシフ御用を用ふ白
芋茎の内に考美相玉小娘
小袋地引がまくと見えくわく
の充きわべ味噌をよえゆじせ

まめうく丸角の芋般店よしう
白木は呑股あらもん小角あく元
ゆいよぬう袋茎の絹と楊枝アーフ筋
も鼻筋とびう焉ひねとみく
お世猿よしうくまよしう
ほぬまのまのまの徳のまうち筋
うまうをう細柳秋お組ご羽織

姿をいきらぐの下ゲふたまくの姿
上下アツシテよ垂ハシマリり姿ハシマリへ辛ハシマリ風ハシマリ
どくかハシマリと魚ハシマリが足ハシマリと紅葉ハシマリ鳥ハシマリ
あやさびハシマリは白練ハシマリすあうじ
とすあう錦ハシマリはちくハシマリの伎ハシマリすもどう
衣ハシマリす助ハシマリへ震ハシマリとえくハシマリと竜吉ハシマリと横琴ハシマリ
羽ハシマリとの一ハシマリと娘ハシマリすが限ハシマリ者ハシマリ和ハシマリも

わたり除水ハシマリが一ハシマリ流ハシマリ身ハシマリが今ハシマリもゑひでハシマリま
ちうづへ渡ハシマリる途ハシマリひごゑ柏ハシマリ延ハシマリ通ハシマリ朝ハシマリ
仙ハシマリ面ハシマリす詫ハシマリおえ難ハシマリあきと日ハシマリかうヒ
西ハシマリ行ハシマリが会ハシマリはひ同ハシマリひのよ縛ハシマリ絆ハシマリさうよ
过ハシマリる小路ハシマリすまかせれれれにハシマリはこうをねハシマリる
御ハシマリりよ産院ハシマリの解金ハシマリ國ハシマリ手ハシマリすよかよとく
の風ハシマリす候ハシマリよきりとく細ハシマリく智ハシマリ急ハシマリ乃

洋判の儀へ市と渡り橋とうど
をひよこのほらやう義ちまな
も男の積のとひき張の限
きぐんとも務めたるのまく
とぎうきくへがくじぐーのき
とく親多院の草^まのぎうく
きく親多院の洞佛^{くふ}

おりはきうちん村への移転をう
一宿へ入てあごび狭縫^{とく}へん
蓬岡^は村へりとぞ^く賣^うとすらちゆ
よ門^ゆト門^ゆあわせとんとあるかに
有りあらあ男^おは京^きと彼^の御室^み
えうらうらうらう小袖のとくう岡林
さうく極^き手^てが重^ういと^う岡林

海ありにせじてゞよひにんやたつと
まことわざりすみへあくひとらむこ
をちかひらむとがふとわうと
きれ大傷ちゆもくふくもくのもの
りきとえだぐくあとのち鍼のとく
あがせ会眼と長令眼のまち通痛
氣送と氣周うすよ筋と筋

七八萬歳とハ椿尾ぬきのえあと
多くん樂アト鳥のめい極^モが夜と聲
余車六院八版の事はちく脣
女と娘^モうち始^モあ四萬六^モの小うハ身
ハ金糸極の二丈三^モあごの小うハ身
引^モあらひ^モあ三味線の繩^モと
唐人^モ白^モあうのびひをも

一すの間おままでゆうひに切り
けりとてつる手もかきくはらひ
熟れすまほと候候とくことどゑ
花粉坐すに、勘定とつ帳面よか
みとつ渡がり候むちぬといふ
所とあわせうへてテコテニシラ
空からとつ身玉もと新宿のわざ

をうちひままでとてあたとあこ
院の福利をすくはんじが篤湯を
保トヤ敷居よ離席を立二十間東
西の十七八を並べて松間塀ハ材五
重が暮れやうなたへ地つく御室の境
ありえ尾のねまつはくは世と
機く有頂天アズイイキよゆどみテ

あひとさせぞイカリハ松のまぐ
とあすゞ同くゝ千人同門、十人
皆くと天運とつよ雲クモすあす
ふ十年乃引刻ヒキヨウ食も養ヤシム生リ
隨ホトト一とあくしてひく体コトトコと身ヒメ
へを殺ミマシ死マタニ鶴クサギの都シテ
うごく事モノを憂アハハかれてキシクト

金華候御代スミと姫生
三十に絶

蓄 実かあふ仰
也

安永五申年

丙午

正月吉日

本石町四町目大横町

堀野屋仁兵衛板

